

—特集— 閲覧室の現状と問題点（その1）

図書館施設には、本を置く場所と本を読む場所とが重要な位置を占めている。本を置く場所（書庫）については、静修7巻6号で特集して現状報告を行なったので、今回は本を読む場所（閲覧室）の現状をさぐり、その問題点にも触れてみたい。

まず、附属図書館から始めて、部局図書室、学科図書室もたずねることとする。

1. 附属図書館の現状と問題点

附属図書館の閲覧室と席数は、第1閲覧室394席（2階）、第2閲覧室92席（1階）、参考図書室44席（2階）、新聞閲覧室15席（2階）特別閲覧室6席（2階）、計551席となっている。これは学内の図書館施設のなかでは最高の席数である。

第1閲覧室、新聞閲覧室は数年前から暖房に加えて冷房設備も整っている。第2閲覧室も3年前に開設されると同時に冷暖房完備のため利用者も多く、満席のことが多い。本年8月下旬には、参考図書室、特別閲覧室にも冷房設備が取付けられ、直接、利用者が使用する施設はすべて冷暖房設備が完備したことになる。例年夏期は、参考図書室は30度を越す暑さのために、とても参考図書（約5,200冊）などひもどけるような状態ではなく、ひところ、二重天井張で暑さをしのいでいたが効果がなく、今夏ようやく関係当局のご配慮で宿願が達成された。

本年は冷房期間も短く十分な効果をあげられなかったが、来夏からは快適な閲覧室をかねて利用されることだろう。

しかし、ほかに問題がないわけではない。第1閲覧室を例にあげれば、昭和39年にその一部をさいて開設した12,000冊（現在）の開架室のために、閲覧机間の間隔が狭くなって利用者の出入りに不自由である。これは、他の図書館の席数が少ないため、本館として一席でも席数を減らせなかった事情にもよる。

では、本部地区の席数はどうであろうか。本部地区の法・経・文・教育・工各学部の閲覧席数比は、工学部が学生数（院生を含む）3,279名に対し304席（昭和45年5月現在）で9%、工学部を除く他部局は、学生数2,759名に対し154席で6%となっている。昭和45年度の附属図書館の利用者数（閲覧・貸出）の内訳は、本部地区の利用者数が43.7%、教養部学生が40.2%を占め、その他16.1%である。教養部を除くとその大部分は本部地区の学生であることがわかる。したがって、附属図書館の閲覧席数の $\frac{1}{2}$ を本部地区の学生にふりあてて計算すると、6,038名に対し、席数は、304席（工学部）+154席（工学部を除く部局）+375席附属図書館の $\frac{1}{2}$ =733席となり、その席数比は12.1%となる。

利用対象者に対する席数比は「大学図書館施設計画要項（文部省管理局教育施設部）」によれば、学部学生で20%、院生で30%であるから、京大は、まだこの基準に程遠いといえる。前記の学部の閲覧席数のうち、特に教官用と定めているのは、附属図書館6席、教育学部12席だけである。基準では30%となっているが、教官の場合は個人研究室をもっているからここでは対象外とする。

以上のことから、附属図書館の席数を減らせなかった事情から、第1閲覧室1人当りの面積は狭く、6人席となっているから出入りするたびに席を動かなければ通れないほどで、ユッタリした落ち着いた雰囲気では読書できる場所とはいえない。

47年度内には、法経両学部約200席の閲覧室が開設される予定（現在、法学部0席、経済学部10席）であるから、少しは緩和されるであろう。

室温、席数のほか、1人当りの面積、空気調節、照明度など多くの点に問題が潜んでいるが、紙面の都合からつぎの機会に譲る。